

特54

21

# 中野狂筋

偽名國術筆



# 足利義満



第五回大名題

忠孝耐忍加賀衰八幕

中幕一名題 富士見西行一幕

淺野川花見の場  
 錦綾亭座敷の場  
 木屋町橋仕返し  
 貳幕目  
 金澤學校門前の場  
 山中温泉宿屋の場  
 三幕目  
 久保田忠太夫宅の場  
 四幕目  
 淺野堤忠太夫殺しの場  
 五幕目  
 金澤花街俵屋の場

向山曾廟島居前の場  
 作田治郎右衛門廊の場  
 六幕目  
 堀川通お六妾宅の場  
 七幕目  
 山上村妙海病室の場  
 大詰  
 金澤大手先敵討の場  
 智覺寺門前の場  
 同客殿作田腹切の場  
 中幕  
 江口鶴屋の場

|          |      |          |      |
|----------|------|----------|------|
| 足輕近藤忠の進  | 我當   | 不動の吉五郎   | 市藏   |
| 久保田忠太夫   | 大三郎  | 石黒左衛門    |      |
| 女房おみよ    |      | 山川貞六     |      |
| 傾城逢坂山    | 又吉   | 山本孫太郎    | 幸藏   |
| 百姓善右衛門   |      | 根井の小彌太   |      |
| 足輕中村幸平   |      | 伊藤助八郎    | 瑞久三郎 |
| 山本次太夫    |      | 小島段八     |      |
| 木曾の冠者義仲  |      | 作田治郎右衛門  | 冠十郎  |
| 娼妓お六     |      | 僕久平      | 後五郎  |
| 後孫太郎妻お六  | 三ツ之助 | 娘菊江      | 光圓   |
| 仲居おえち    |      | 治郎右衛門娘お秀 |      |
| 前並宗八郎    | 仁三郎  | 後忠の進妻お秀  | 團之助  |
| 鶴屋才兵衛    |      | 漸造うつしゑ   |      |
| 久保田忠二郎   |      | 久保田忠太夫   |      |
| 善右衛門姫おきさ |      | 前田土佐守    | 壽三郎  |
| 後忠太夫の娘   | 鬼丸   | 西行法師實へ   |      |
| おきさ      |      | 佐藤兵衛則清   |      |
| 後尼妙海     |      |          |      |
| 楯野六郎     |      |          |      |

但し筋書之儀は表面の役割と引合之上は讀被成下候以上  
 中幕の儀は壹はんの五幕めと六まぐめの間にて御覽  
 入候得共筋書ハ末に御座候以上

○第一番目序幕本舞臺都而錦綾亭の休愛より町人三人は増居て(町)下レそろ〜花見と仕よふ、這入る愛へ娼妓は六仲居を仲出て来り(仲)れ六さんおまへのよふ酒しやんしては(六)何れ私しや酔ものかね(増)ヲやお六さん今日日は、愛へ平次出て来り(平)へいよろしうムリ升る直にいつて参り升(六)おまへは平次さん(平)お六さん何の用かしらねへが今親分の用で(六)ヲ親分か(増)此錦綾亭へ最前から(六)親分の座敷へわたしをつれて下さんせ(増)アイ〜トお六お増這入る(仲)はんよ山本さんの酒も困るがお六さんよ(平)イヤその山本といふやつは去年木屋町で出逢つたやつ間違ひにならねへ内お六さんをつれ出してくれ(仲)よいよいあア(平)ドレいつて来よふかト橋懸りへ這入るお仲入口へ這入る忠次郎菊江出て来り(忠次)コレ菊江もそつとはされて下され(菊)どふぞ見たしお愛へ娘お秀下女お芳僕久平出て来り(芳)お嬢さま此淺の川の花盛り(秀)よい景色じやよいあアト愛

へ山本孫太郎伊藤助八郎前並宗八郎竹中常次酒よ酔ふて出て来り(孫)此錦綾亭で酒多んもよう(助)今宵の木屋町へト此時久平孫太郎の足を踏(孫)コリヤ親父武士を土足あかけたな(助)何若先生を土足あかけしと(久)御免被成て下され升せ(秀)御ゆるし被成ませ(孫)ヤそらいつこきたの作田治部右衛門どの、(芳)いかにも御秀さまでムリ升る(孫)作田の下郎なれば猶了簡ならぬ(芳)そこをどふぞ(助)その詫言は娘を酒の相手よトお秀の手を忠次郎見兼て(忠)まアお待被成きて下されませ(孫)我何だ(忠)ハイ私しは久保田忠太夫が次男忠二郎にムリ升る(孫)だまれ足輕風情が知つた事でいさいわぬ(忠)さやうでもムリ升ふ(助)何よこやつも共に酒の相手よ(孫)うしやアがをトお秀およし忠次郎をさ〜よて無理よつれて入口よ這入る(久菊)コリヤ何ぞしたらよかるふなア案事の仕打よて道具廻る

○本舞臺都而錦綾亭座敷の休愛より以前の孫太郎助八郎宗

八郎常次秀お芳忠二郎居て(忠)どふぞおゆるし下され(孫)イヤ了簡の相成らぬね秀色の酌を召れ(秀)そればつかり(助)ゆるせと申か(秀)ハイ(孫)コレお秀どの手前とこ元にとつこん執心(秀)そんならそれゆへ(忠)スリヤ又あんまり(孫)それとやつをまつ〜り召れ(三人)心得申したト此時足輕近藤忠の進出て(忠)暫くお待下され升せ(忠次)よい所へ兄者人(忠)の様子に殘らせたり升たどふぞおゆるし被成れて下され升せ(孫)いかもゆるして遣よふが胸づくよと連れ歸れ(忠)何の私に胸づくよと(助宗)エ、いつそ身共がト打つて掛る忠の進身とか見し兩人の手を取る立廻りト、兩人かなむ孫太郎いらだち打つて掛るを忠の進刀を打とす(三人)下郎に似合ぬ適れ手の内ト上手の障子家体より吉五郎出て(吉)ちつと骨身よこたへたの(秀)そら吉五郎(吉)委細は〜と問で聞升た聲よ感心此御息女を御一所よつれてお歸り下され(助の三人)イヤまだ了簡ならぬ(吉)やかましひわらふ今の

胸づくで連れて行のた鬼やかふぬかとさらおれが相手だ子分のやつら皆来ひやいト子分大勢出て来り(吉)侍四人片ッぱしからやつ付る(大勢)合点だ(忠)〜ア〜私よお任せなされ(吉)此お方よお任せ申せ(忠)イヤ何先生後無禮の段の幾重もおゆるし下され(孫)〜、よ〜了簡の致きてくりやう(三人)それで日ごろの恨みが(孫)〜、ハ〜それの身共が胸よ(三人)まづ〜ト孫太郎先に三人奥へ這入る久平菊江出て来り(菊)忠次郎さんお怪我がなふて(久)有難ふムリ升る(忠)何のお禮よ〜及ませぬ是どいふの何ぞの御縁(吉)平次とはじりせうとやを後門前迄(平)よふふ〜いやと(仲)とれお送りや升ふトお秀お芳久平平次這入る(忠)さからば吉五郎どの(吉)又お目に掛り升ふ(忠)いかに苦勞を仕たわ〜ト四人打仕よて道具廻る

○本舞臺都而木屋町橋の休愛より孫太郎外三人居て(孫)最早是へ足輕の参るはつ(三人)何れへ参るの被れてとムラ



何と(治)當春淺野川にて娘をお救を下されしそのせつく  
 わしく御手練り承り折めらばお目に掛り娘を差上んと思  
 ひし所是よて目掛りしこそ幸ひとふと娘を御賞下さ  
 れし此時お秀出て(秀)「エリヤ、とさまよ、お阿りなく  
 (治)何んの阿らふとよかお賞ひ下され(忠)「それ付淺  
 野川の事よりして山本をばじめ三人まで拙者も意恨をふ  
 くまれば御難が(治)「それ身共々胸も(忠)「さまでの仰  
 せれば御息女をてうだいの仕る(治)「よく御得心下さ  
 れたト此時お秀出て来り(秀)「斯ういふ事もあらふかと御  
 酒お肴を(治)「よく心付たイヤ内祝言を(忠)「その義の  
 金澤へ歸宅の上父に一應(治)「成程親を重んじ(忠)「(手前  
 は明朝出立の仕る(秀)「御歸宅は上御祝言(秀)「嘸御慮しう  
 入り升ふ(治)「明朝出立とあれを丁度能き道連れ今宵の  
 ゆるりト此仕組まか、仕打にて暮

○三幕日本舞臺都而足輕右太夫内の体爰よ菊江おき源  
 太衛門平六忠太夫居て(源)「是組よりの品にムれ心(平)

御受納下され(忠太)「これいお無用下され俸忠の進も留守  
 中より當分のあきさの客ふんにて(源)「さやうてゐるか  
 (平)「よい嫁御でゐるの(忠太)「さふるか昨日参つた斗り  
 でムれば源、まかしお服サト這入る(忠太)「まかし今朝忠  
 二郎を忠の進の迎ひ遣りしはやく歸ればよいがコレ  
 おきさ、奥を御片付置くりやれ(き)「罷り升た(菊)「コレ私  
 御一所にト奥へ這入る爰へ忠の進出て来り(忠)「ハハハ  
 人只今戻り升て入り升る(忠太)「ハ、忠の進かコレあみよ  
 くト呼ぶおとよ出て(み)「忠の進戻つたかとよして忠二  
 郎の(忠)「何忠二郎とは忠太(悦)「バあるゆへ今朝迎ひ  
 又出したは(忠)「(行違で入り升る(忠太)「コレおきさ、  
 トおきさ出て来り(き)「ア、(忠)「此お女中の(忠太)  
 その方よ迎ひよやりしは是成る娘よ付て(忠)「婦人よ付  
 てと(忠太)「されは伊藤助八郎迄のそその方よ意恨をふ  
 くみその扱ひとて五十兩の無心出来憎ひ金子貳十兩調ひ  
 跡三十兩よ苦勞をなし居所へ妻が弟が此娘よ三十兩の持

参りて嫁よりたいたいののはさしこの三十兩よ是非なくそ  
 ちが嫁と留守中(忠)「それよ作田さまへト此時治  
 部右衛門お秀お芳久平出て来り(久)「頼もふ(忠)「やあな  
 たは(秀)「忠の進さま(治)「親どの(忠)「失禮乍親人はじめ  
 去ばらく奥へ(忠太)「さやうかト三人奥へ這入る(忠)「ま  
 づ、是へト治部右衛門お秀内へ這入る(治)「扱そのせの  
 はふしきお縁にて娘秀をね身(忠)「その義も未だ親父  
 へ(治)「イヤ、手前と申せば親夫も違約はあるまい(忠  
 の)「去ばらくと奥へ這入る爰へ善右衛門出て来り(善)「多  
 分姪のおきさが祝言と聞たど内へ(治)「こなたを何んぞや  
 (善)「且しは爰の嫁の身内じや(久)「馬鹿申せ(善)「貴さまハ  
 何じや(久)「爰の内の嫁の庄従(善)「おれのまねをして居  
 るじや(治)「余はとたむたやつじやト此仕組よてとふや  
 廻る

○本舞臺都而久保田屋敷奥の間の体爰よ忠の進居る(忠  
 の)「父よ不孝よならざるよふとよか分別のありそふなも

れじやト爰へおたき出て(き)「是よお出被成升たか御膳  
 をれ上り遊ばし升せとふと女房じやと今お目かけられて  
 ト爰へお秀出て(秀)「ハ、忠の進さま(忠)「お秀どの何ん  
 と思ふて(秀)「あなたのお返事お遅ゆ、シテこのお女中の  
 (忠)「コレヤ手前の義理(秀)「さやうで入り升るふしき  
 御縁で山中の湯治場で婚夫の約束(き)「エ、置て下さんせ  
 私しが忠の進の妻でムんす(忠)「そなたのわしを思ひ切  
 て下されと爰へ忠太夫出て(忠)「ア、爰な人であし親の詞  
 をとむさ不義いたせらト此時治部右衛門出て(治)「ア、  
 御息は不義よあらせしつとぞや淺野川の一筋より娘が暮  
 ひ三ら湯治場よて身より無理頼みとふ子御子息に親兼  
 に申受たり(忠太)「もつたいたは足輕風情の俸をこれ程よト  
 爰へれみよ出て(み)「よふすし開升た義理ある娘は親の高  
 下左程御所望のあなたへ上て被下(治)「スリヤ御得心でト  
 爰へ善右衛門出て(善)「その縁組を且しがならん金をとつ  
 たらよいことそれで済と思ふかト忠の進仕案して(忠)「



忠孝  
馬

れ秀どの縁にもふ是まで引出物のお返し申(秀)スリヤ又  
 ませ(忠)の譯の今お開の通り(秀)そふじやト死ふとする  
 (忠)の何ゆへ(き)そふじやト黒髪を切る(み)コリヤ娘は  
 は(き)サアわたしや今から尼に成る程よとふお秀さま  
 と添ふて下され(治)コリヤ娘此体を見ればおせ死ぬ(善)  
 エ、待て下されそれでは姫の心も無足(治)忠太夫どの御  
 承知なれば忠太(何)の拙者よいなやがふらふ元いとさへ  
 はそれがしが早まり過ぎしゆへ今悴をお秀さま(忠)と  
 ふす私しえ未來の契りは(忠)此世の假舎り未來にかあ  
 らすト爰へ菊江久平お芳出て(菊)お氣の毒ありおさるさ  
 ん(久芳)無や御せうさまお悦びでふり升ら今宵の御祝言  
 を(忠)今爰で幸ひ爰は御酒徳利(善)おたごむわしが村  
 の明庵室よ來やれ(き)アイ(治)相よ相生の松こそト語よ  
 てまなく仕打幕

○四幕日本舞臺都て淺野堤の体爰は曾笠賣飛脚居て(曾)  
 此大雪に曾笠のあつても後がれ(飛)此先の荒物屋が戸

を明た糸たてでも買成るがい、ト飛脚這入る(曾)此雪ヒ  
 や此荷物とレト走り這入る此時孫太郎助八出て來  
 り(助)若先生此雪を見て朝歸りとい(孫)イヤ手前あま  
 り宅を明過ぎ首尾を致して又今日の晝遊びと致そうト爰  
 へ忠太夫出て來り(忠)そこへお出被成升る山本さま伊  
 藤さまではふり升せぬか(助)忠太夫かどこへ行(忠)伊藤  
 さま此八月中御用立升た金子をおかへし下より升せ(孫)  
 コリヤ、身共足輕如き金子を(忠太)さやう仰せ成れど  
 証文がふり升る(孫)なんだ証文を是へ見せ(忠太)是御  
 覽被成ませト出せを見て(孫)よくも身共門弟の前で催  
 促を致し恥辱をあたへたなト証文を引さく(忠太)大切の  
 証文を(孫)不禮者めがト振打る脊中を切る(忠太)コリヤ  
 お切遊はしたなア(孫)切捨く、ト是より忠太夫無手の立  
 廻り孫太郎の四人拔身よて手を負せる(孫)お秀女へ面當  
 のなぶり殺した(忠太)何嫁のお秀へ面當と(孫)我れが  
 悴の忠の進よ不覺を取りし身と執心のお秀を妻よ娶りし

二度憤憤をこしは是で胸がはれた(忠太)扱てはそれゆへ  
 (孫)エ、くたばりさらせト又立廻り成り、忠太夫を  
 殺しとめをさす(助)然のしかやうよ致せば長居は恐れ  
 (孫)片時もはやくト四人花道へ行爰へ吉五郎出て摺違ひ  
 四人の這入る吉五郎死骸を見て(吉)コリヤ侍ひが切られ  
 たト爰へ忠二郎出て來り忠二心掛りな烏啼コリヤ親人よ  
 り(吉)忠二郎どのこなたの親御(忠二)吉五郎どの(吉)  
 もしや今の四人が(忠二)何四人とは(吉)こなたの親とわ  
 るなら今すれ違つた(孫)孫太郎(忠二)スリヤ孫太郎がそれ  
 ト行掛る此時前田土佐守出て來り(土)コリヤ侍(吉)  
 (忠二)あなたさま(土)前田土佐守成て子が謀らふべし  
 旨もあればシテ討れしは何者成る(忠二)御當家の足輕  
 忠太夫ふり升る(土)武藝の聞へありし忠の進(忠二)  
 いかよも父にふり升る(土)相手を山本孫太郎と見留めし  
 が某に存意もあれば待れ(忠二)目前敵を置かからト此時  
 土佐守持し鐵砲を打忠二もしや今の(土)佐(敵)より討

ばなんとする(吉)それが由断大敵(忠)めつたよ由断の  
仕らぬト切掛るを留る(吉)敵(忠)士(吉)ト此仕組よて  
幕

○五幕日本舞臺都而木屋町花街の体愛は娼妓二人居て  
(娼)はんと思へ心お六さんは浦山しいわいなアトお六出  
て来り(娼)ヲ、お六さん今もおまへの噂を浦山しいとい  
ふて居たわいおア(六)浦山しい所か孫太郎さん身受を  
されたその後ハ小達野の吉さん逢事あらぬ今の身の  
上をふして今日ハあかさん(娼)アイお内(六)それ  
では一寸お目よ掛り(娼)そんなら見たしもト二人這入る  
此道具廻る

○本舞臺都而花街廊下の体愛へ足輕三人よて忠の進を引  
立出て来りお富留め乍出る(富)ぬしハ酔ふて居やまやん  
そゆへ了簡してやらしやんせ(足)何も了簡しるさういふ事  
はない手前が酒の相手を頼むア近藤受まやつ(忠)の  
イヤ番(富)モシそのよふ番しやんしては(足)

エ、置つしやいトキニ近藤うじ前田さまの御吟味で  
淺野堤の人殺しの相手の孫太郎さまいふ事は誰ぞらぬ  
ものなぬ家中の噂もいつ頃敵を打のた(忠)イヤ中く  
敵所るかありやみんな親父不調法そんな事より浮世は香  
事(足)親の敵を打ぬとはさんば犬猫もおどつた人  
でさし猫やら猫も御馳走をト立懸るを此時お六出て来り  
(六)みあさん何を仕なさん(富)おまへりお六さん(足)  
何で我くがさまたげするのだ(六)さまたげ仕升わらし  
も元ハ愛の内よ勤めたお六といふ者あるがあまり不粹な  
おまへかた今でハ山本孫太郎といふ人のお世話に成り  
(足)そんなら兼く噂に聞く實ハその孫太郎さままたの  
まれて(六)エ、(足)何山本さまの愛妻とあるからイ、た  
い事も(六)そふ打とけて下さんそをばそれ子供衆ハ来て  
下さんせト娼妓出て(娼)何ぞよふか(六)あたしがいふ  
てハ濟ぬけれどおまへ方のお客を(娼)アイト足輕四  
人と連れて這入る(富)お六さんよふ捌て下さんした(六)

私しの出る幕でいなければ(富)有難ふんした(六)私し  
いもふお暇を(富)もふお歸りか(上)日の暮れぬ内トは入  
る愛へ若り衆出て来り(若)モシお富さん近藤さんい  
たいといふ人(富)何をいふよもたわいがさういふア  
ト此時治部右衛門出て(治)たわいがさういふ手前へそれ  
忠の進が相方お富はその方(富)ハイ(治)そら立ちて  
(富)ハイト這入る(忠)ヤあきたハ眞御さま(治)娘秀が  
離別よ参つた(忠)何離別ト(治)後ろで様子は聞たそ  
の心根で親の敵と見る見さけ果たてなし離別状と出  
て渡しやれ(忠)コッヤよのういにかよも書て渡そふト  
書て渡と(治)いかよも受取申た(忠)最早他人(治)エ  
、見そこのふたわへト此仕組仕打よて道具廻る

○本舞たい都而向山官廟鳥居前の体愛へお秀出て来り  
(秀)とふ夫トの心が直り敵を打よふと日毎に参る神  
詣ト愛へ助八の三人出て(助)お秀どの(秀)あきたハ(助)  
うつそや淺野堤で(秀)そらおつまやれば覺のゐる(助)お

ひでこの夫を大事と神さぶりの止め被成れ人よ親を討れ  
その敵を討ぬ大としぬけそれより山本うじへ手前が仲立  
致とふ(秀)エ、聞たくもない事何んで孫太郎に穢らわし  
いわい(助)孫太郎どの願まじし事なれば(秀)いや  
じやわい(助)助(助)そらいやアいつそト是より立廻りよ成  
るトお秀を細よかける愛へ厚まくの浅野の子分四人  
出て(子分)ヤレ女を手込にそれト又立廻りよ成りト、  
助八三人ハかきは逃して這入る愛へ吉五郎出て来り(吉)  
コッヤ女を(子分)それゆへ侍を追つちらし(秀)どきたさ  
まかり有難ふんり升る(吉)そふしておめ(秀)さん(秀)ハ  
イ作田治部右衛門が娘秀(吉)お秀さまか(秀)こなたハ吉  
五郎かい(秀)今でハ近藤忠の進方(吉)それじゃ淺野で  
あつた足輕の(秀)タイの(吉)ろふしていさごころこへ  
(秀)サア他人前では(吉)成程手めへ遣はトあし先へ  
(子分)よふふんざい升ト子分四人は這入る(吉)何れこれハ  
御夫婦いさかい(秀)それには段ト(吉)何かはお聞きた

その上で、此仕組をなして道具廻る

○本舞臺都而治部右衛門郎の体愛よ治部右衛門居て(治) たつた一人娘をば足輕風情に嫁遣りしがはやく久平めめ娘をつれ参ればよいに、愛へお秀吉五郎出てきたり(部)コリヤ秀今使ひと遣し夕(秀)そのお使よはわひ升せぬが今宵難義も出逢升て(治)何難義と(秀)夫トの身も付天満官へ夜参りの道いつぞや淺野で出逢一孫太郎が門弟共此身をとらへ孫太郎の妻も成れと無体の狼藉私の難義を救ひくれし者あつて(吉)ハイ旦那さま治難義を救ひしは吉五郎成るか(吉)ハイ御勘當の身を持升て(治)過分成るす勘當のゆるそコリヤ秀とらば歸るに及ばぬ(秀)スリヤ又どうして(治)夫ト忠の進より離別の狀を取つて参つた(吉)秀)エ、何ゆへでふり升る(治)身の彼れのだじやくゆへ(秀)と、さま(吉)その忠之進といふ人

孫太郎よ由断さす手立でふり升に御せうさまの事は私に

(治)エ、だまれ身が見扱たる彼れが性根かのれら如き(吉)それの大きな御了簡違ひ敵を討ッ相違ひムり升せぬ今の悪行の手立よて本望とげたらあなたはさんと被成る(治)娘も眞の首を添へそちよ手渡し致せ(吉)見事申受升(秀)スリヤ此身ゆへ命をかけて(治)その心を忘れなよ(吉)あまたさまよ、此仕組よて幕  
○六幕日本舞臺都而堀川通りた六妾宅の体愛に下女お松僕安藏居て(松)けふ旦那さまがお出ゆへ(安)とふかそれじやア掃除を仕て置ふト此時お六孫太郎助八郎外貳人出て来り(六)旦那お忘れものはふり升せぬか(孫)何も忘ものはあひ今申した身が發足の義他言は相成らぬぞ(六)ハイ御出立いつ頃(孫)未だ定日ハからぬ(助)

身共も御一所ゆへ御案心被成れ(六)さやうでふり升るか

(孫)まからばお六(六)モウお歸りまで(孫)よふ参らぬ(安)サアお出被成升せト孫太郎先よみさく、這入る雨の音成り(六)また降り出した旦那のお傘と(松)畏り升たト傘を持お松這入る愛へ吉五郎出て来たり(吉)俄の雨ゆへ軒下をお借り申升る(六)おまへハ吉さん(吉)お六か愛ハ孫太郎の内ト愛へお松出て来り(松)モロ旦那よお目に掛らぬ目いゝア(六)それハこつらの幸いそのお方を(松)ハイ、サアあまたこちらへ(吉)そんな言はすこし雨やとをト内へ這入ると道具廻る  
○本舞臺都而お六居間の体愛よお松お六吉五郎出て来り(六)コレ松や横町へいつて(松)ハイ、畏り升たトは入る(吉)た六今こおめへハ孫太郎よ受出されおれよ何の沙汰もなく癪よさわら(六)そんな言はれてはわたしごと

まるのさアノ孫太郎ハ近く江戸へ行との事(吉)スリヤ

孫太郎が江戸屋敷とゆふこた(六)サアとこやらさらぬが江戸と斗り(吉)しらねへものがあるものがト愛へお松出て(松)れ説らへものが参り升た(六)それハ御苦勞おまへは遊びよいつてもい、(松)ハイをこしの間ね願ひ申升るよふして一ト間へ蚊屋も釣つて置升たト這入る(吉)お六是は誰れの紙入だ(六)それハ旦那の紙入(吉)そふの此手拭ひをまぼつてくれ(六)ハイト這入る(吉)とふの孫太郎の様子が開てへものだトお六手拭ひを持出て(六)ハイ手拭ひ(吉)そいつア有難ヘシテ孫太郎立いつた(六)それれもいつやらト此時大雷鳴る(六)とふそわたしといつ所よト兩人蚊屋の内へ這入る愛へ孫太郎出て来り(孫)お六く(六)ハイ、トまご、とる吉五郎は庭へ隠れる(孫)はやく明る(六)ハイ只今ト戸口を明る(六)あまた





十四

ハ旦那さま細入でムリ升るか(孫)さやうじやそれよ出立  
 が極つた(六)さやうでムリ升るか(孫)お六身が留守よ貳  
 ツの枕で男とねたか(六)エ、これはあなたのお留守にも  
 斯うしてあなたを寝る心(孫)そうか(六)そうしてあなた  
 のお立(孫)明後日(吉)それさへ聞けば(孫)聲は誰やら  
 (六)今夜泊り被成升せト無理に下置此仕組よて幕  
 ○七幕目本舞臺都而山上村庵室の体爰へ百姓貳人おみよ  
 住ひ居て(百)コレこなたは盆のお迎ひ火いもよ濟ました  
 か(み)只今迎へ升てムリ升る(百)そよかいのうそれさや  
 わしらもト百姓二人這入る(み)悴忠の進が性根にも困つ  
 たものじやあ爰へお秀出て来り(秀)眞珠庵とはこなた  
 でムリ升るの(み)そなたを嫁女かいあア(秀)姑御ごま  
 (み)シテ今頃何と思ふて(秀)現在の親御迄見限る程の夫  
 ト忠の進と、さまの御立服にて離別も成りましたが眞御

さまの菩提をわたしよも吊わして下さりませト爰へ妙海  
 出て(妙)お秀さまよ御無事で(秀)おまへも無事でござ  
 り今から私を尼よして下さりませ(み)娘とら、嫁女まで  
 尼よするとは(妙)モシカ、さん何のさくともゆふげ成と  
 も(み)そふ仕まふトおみよお秀をつれて這入る爰へ忠の  
 進酒に酔ふて出る(妙)ヤあゝたの兄上(忠)おささどの  
 かシテ母人は内か(妙)ハ、今奥に(忠)コレおささ今度  
 お秀は離別したもへ今からそちを元へにする心とさ  
 やへト爰へお秀出て(秀)旦那さま(忠)サ、そちはお  
 秀何で戀の邪ををる(秀)ちつとはお邪も致し升ふ  
 (忠)エ、去つた女房に用はない爰を出て行それどもお  
 ささを取持か(秀)何として是れがマア(忠)いやなら出  
 て行爰へおみよ出て来り(み)おのれはのらへ義理あ  
 る中の悴と思ひ異見もせを置けば能事と親の敵も討性

十五

根なくおまつさへ娘だらくろささのさアコレ此位牌を見  
 やき親御のせつかん最早勘當とや(秀妙)エー(忠)勘當  
 承知是からは一本立だ元からは是を望んで居たのだ(秀妙)  
 それではあんまり(み)アアヤ人ではないわいのラト無理  
 に兩人をつれておみよ這入る(忠)母人はじめ女房妹  
 御了箇下され是も敵孫太郎油断さす手立と思しおゆる  
 し下されト此時忠二郎出て(忠)兄上がさとういふお心  
 どの躰じらすそしりし段の御ゆるし下され(忠)斯手立  
 に落入て敵山本明後日ハ江戸へ發足ト吉五郎よりせらせ  
 我念細の届た子(忠)二)とういふ事あら拙者も支度を(忠)  
 の(イヤそちの跡よ残母の孝養且ハ久保田の家を(忠)二)  
 スリヤお供(忠)叶わぬ事そちハ吉五郎へ参り出口を  
 頼むとせ(忠)二)ハツト這入る爰へおまよお秀出て(み)  
 是悴堪忍したもそよいふ心としらぬゆへ犬畜生の

去りし位牌の手前面目ない(忠の)跡に難義をかけまい爲  
 心よもなき悪口雑言母人女房かちら恨まと思ふな(み)  
 せめて今際に娘に(忠の)それを返して歎死の種ト此時妙  
 海出て(妙)何んのわたしが泣升う見事の敵きを討應せ取  
 辱をす、いで下さり升せ(み)只此上の頼みよは嫁女が縁  
 を元に(忠の)離別も跡に難義残さぬ身が寸志(秀)そんな  
 ら此身ハ(み)目出たい門出ト孟をして行やれ(忠)のイザ  
 てうだい(妙)思へん是が此世の(三人)別れの孟(忠)の門  
 出を祝すに涙は不吉酌をしやれ(秀)ハイト此時山本仲  
 間出て(仲)扱こそ旦那をどや懸るを思ひ進見事返を替  
 く(別れ)をふまむ懸の仕打よて暮  
 ○大詰本舞臺都而金澤大手先の体爰又辻番人居て(辻)怪  
 一ひ者があちこちを徘徊するようす御家老の土佐守さま  
 へとは入、爰へ子分大勢出て(子)親分の言付て大手先の

出口の張番トは入る此時忠の進出て(忠の)けふ山本孫  
 太郎思ひをそらそ日時あるの添さし爰へ吉五郎出て  
 (吉)忠の進さまり(忠の)吉五郎どの是成る書面と仇討の  
 屈書老職土佐守さまへ(吉)畏り升た、吉五郎遣入る爰  
 へ孫太郎助八郎の三人出て(孫)今朝の立立ハ誰も氣の付  
 者なし(忠の)孫太郎まで(孫)待ど何者だ(忠の)思な一  
 言忠大夫より忠の進成るは(孫)エ、(忠の)サア親の  
 敵覚期なせ(孫)返討だ(助)三人(覺)期させト是より立廻り  
 よ成り爰へ子分大勢出てみま、立廻りよ成るト、(忠  
 の進)孫太郎外三人を討留めをさと爰へ吉五郎出て(吉)  
 適れ見事(忠の)多年の恨みはらしてゐる是より直智覺  
 寺へ引どり割腹あさん(吉)私ハ作田さまへト悦びし仕打  
 よて道具廻る  
 ○本舞臺都而智覺寺門外の体爰又捕手大勢居て(捕)山本

孫太郎を討たる忠の進をお渡し下されト爰へ山本次太夫  
 出て(次)おのくお扣へ下され(捕)あなたは御師範(次)  
 今日弟孫太郎を討しは適れ孝子全く弟が悪業トでムれ  
 ば忠の進を恨み召れまト爰へ秀吉五郎出て(吉)忠の進  
 さまが仇をお討被成れおせうさま悦びでムり升う(秀)  
 是が嬉しうのふて何んぞ仕まうト此道具みま、仕打に  
 て廻る

○本舞臺都而智覺寺客殿の体爰又住職光月忠の進居て  
 (光)忠の進土佐守さまの御沙汰まで切腹はまたれよ(忠  
 の)それじやとやて、爰へ忠三郎(忠)のそら弟(忠二)  
 イヤ此兄弟ハ私し事前田さまよりお下知を受忠の進をか  
 らめに向ふたる捕手の役人(忠の)御家老さまのお情捨が  
 たしイザ忠三郎兄又繩をかけよ(忠二)ト、此上は是非よ  
 及ハぬ兄上御免ト繩をかける爰へ所化出て(所)當寺の檀

中作田治部右衛門さま四人を受取よお越よムり升るト爰  
 へ治部右衛門出て来り(光)作田どの思ひよらぬ俄のち  
 し(治)前田さまの仰せよは御法を破りし罪人所分一決な  
 そまごそまごしに預れよとの仰せ(忠二)そりや其元よハ  
 ナナト吉五郎出て来り(吉)旦那さまばら、(治)そらそ  
 吉五郎娘もども(吉)うつそや御約束と御縁を(治)メ、  
 ヤそのしらぬ事(吉)メリヤあんなまりト此の時土佐守出て  
 (土)吉五郎とやらまで(吉)ヤアあなたさ、(忠)御家  
 老さま(土)コリヤ治部右衛門再縁を結ばん爲腹切ッて居  
 よよの(治)流石ハ御家老お目高し作田が切腹を見届下さ  
 れト影腹をきつて切て居るま、悔りあし(秀)ど、さ  
 まよは何ゆへ(と)な、(御生書)治(我切腹は忠の進娘諸  
 共落さん前田様ハ願ひしが早もあさどり且は吉五郎への  
 約束(土)作田が切腹の上は忠の進ハ當國ハ叶わ他國は

勝手たるへし家督とは弟忠二郎(忠)の斯まで御厚情有難  
ふムリ升る(忠)ニテ、忝あひ(土)斯成る上ハ常地をば  
やく(忠)の長居ハ恐れトみなく別れをあしむこなじよ  
て幕

○返し本舞臺都而篠原只の八幡鳥居前の体爰に百姓三人  
茶亭居(百)忠の進とハム足輕が鎗術の先生の山本孫太  
親の敵き討じやね(茶)さやうでムリ升る(百)又は  
な一ム参り升ムト這入る爰へ以前の子分三人出て(子)孫  
太郎ハ忠の進との討取つたが跡の三人を逃任や親分へ濟  
ねへ爰らよ忍んでト這入る爰へ助八郎の三人出て(助)よ  
ふく爰まで逃たが忠の進ハ聞ば東へ行との事惜み此所  
が道筋と鳥居の内へ這入る爰へ忠の進ハ秀吉五郎出て來  
り(忠)の前田さまの情よりトまづ東へ(吉)御本望と  
透けて嘸お悦びでムリ升る(秀)はんよ此身も共くム東

へト爰へ助八郎出て(助)忠の進覺悟ト打掛る是より立廻  
りに成りト(忠)の進(三人)と切倒す爰へ忠二郎菊江出來り  
(忠)二菊(兄)上さま嘸御本望でムリ升る(忠)の最早心も掛  
る雲もさく(吉)東へ趣く(秀)菊(門)出の血祭り(忠)二家名  
ハ拙者が相續(忠)のチ、目出たいハ打出し

○中幕本舞臺都而江口鶴屋の体爰に仲居膳橋をふいて居  
る料理人側に居て(仲)向ふ見へるハ惜み客人(料)ドリ  
ヤお肴の支度をと料理人這入る爰へ石黒左右衛門男達三  
人出て來り(仲)チ、皆さん最前から御大盡が(石)それは  
嘸かし義仲らを迎の(男)四天王(石)見れハ御前を迎  
ひに來りし事取次くりやれ(仲)アイハト一入這入る  
(石)コリヤ亭主相方を(才)その御相方ハ此花(石)落花と  
なして御異見(才)アノ義さまへ(石)男(案)内仕やれト皆々  
這入る爰へ惣かき惣をかつき出る(惣)ハイおさやくさま

ト惣より西行法師出る奥より仲居才兵衛出る(才)是ハ御  
大盡さま(西)身ハ田舎者じやが傾城はどれでもかへる  
の(仲)お好み次第(西)それあれば逢坂を頼じや(才)逢  
坂山から賣金が入升る(西)それはあらん何んでも下直よ  
(才)マアよろましくムリ升るトみさくハ入る爰へ逢坂山  
新造付うつしゑ出て來り(才)義大盡さまがお待ちかぬ(逢)

それはお氣の毒ト此時仲居出て(仲)太夫さんよムアモ  
親方さん今の田舎大盡少逢坂山をはやくと(才)それは  
困つて太夫ハ義さまの揚結(仲)コリヤ斯ふしたらどうで  
ムんぞ此突出しの寫繪さんを逢坂山といふて出してハど  
うでムんず(才)成程名を讀み突出し新造それがよかるム  
(寫)私しの名代でよい事あら(才)それは有難ふムリ升る

(仲)そふいふ事ならそこしもはやく(寫)そんなら皆さん  
トは入る爰へ石黒出て(石)妹ハ(逢)コレ兄さん人はな  
けれと壁ハ耳(石)判官と心を合せミちを傾城に仕立義仲  
を討ツ計略ヲ付たるに討ねば平家へ濟ぬぞ(逢)今宵の内  
に(石)我を飛驒の左衛門ともしらぬうつけかならせぬか  
るなト此仕組めて道具廻る

○本舞臺都而鶴屋奥座敷の体爰に仲居床を敷て居る(仲)  
是で田舎大盡の床もよしト爰へ西行出て來り(仲)御大盡  
さま爰へお床をのべ升た(西)チ、お世話ハ逢坂を呼で  
くれ(仲)アイハトは入る爰へ寫繪出て來り(西)チ、逢  
坂山侍兼た(寫)サアお待ち兼も御尤苦界の勤も父は大内に  
て北面母より三ッのどし死別れ父を尋ねる其爲に(西)ハ

「か愚知は買よのまのらぬ(寫)とふぞ是非に聞て下され  
 ト泣く(西)ヲ、泣蕪入寐たるト屏風を立廻り(西)我頼朝  
 に頼れ義仲の悪逆をいさめの為えりし今の詞で、我娘に  
 違なしヨシ逢坂あれば義仲の我輩同前逢坂なれば殺よや  
 ならぬト此時寫繪起上り(寫)櫓子の寐たふりよて聞まじ  
 たおまへが父上わたじや逢坂でいふんせぬそのせうで最  
 前拾ふた此手紙ト出す西行見て(西)楯の石黒左衛門の平  
 家の侍飛彈の左衛門ニテ義仲の寐間(寫)アレア、向ふ  
 の(西)ム、竊よ〜ト此道具廻る

◎本舞臺都而富士の間の体爰へ西行出て(西)ヤア〜義  
 仲その身將軍の織にちり乍賣女にとろけし心糺しに參つ  
 と佐藤兵衛則西行法師ト此時石黒出て(石)君の寐所へ  
 忍びし曲者からり捕られよト此時(子分)心得申たト是よ  
 り立廻りよ成りト、ミ〜ト述で這石黒を嘗る屏風を

取のける内は義仲逢坂を押へ居る(義)逢坂覺期ト抜き打  
 よ石黒を切るアア〜早參れト爰へ楯野根の井出て來り  
 (義)都のよふその(楯根の)兼て仰せを受姿をやつし鎌倉  
 の館へ忍び入りのこらに討取立歸つてムリます(義)此上  
 の示めし合して何のの事を(楯根の)心得申た(義)行け  
 (楯根の)ハット這る(西)その御心体を見る上ハ御費をト  
 渡す爰へ楯野根の井出て(楯根の)我君の御出陣(義)是ハ  
 貴僧へト出せを見て(西)コリアコト寫繪が年季證文(寫)  
 是も君の御情(西)御實渡せを用さる恩僧はやおさらば  
 (みなく)おさらば、別れ〜の仕打幕

明治十七年八月廿八日御届 (定價八錢)

日本橋區鬮發町三丁目十二番地  
 編輯兼 出版人 保坂由兵衛